

Title	ダブリン科学協会
Author(s)	橋沼, 克美
Citation	言語文化, 37: 103-111
Issue Date	2000-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/8853
Right	

ダブリン科学協会*

橋 沼 克 美

17世紀はヨーロッパにおいて学術団体の創設がみられた時代であった。イタリアでは1600年にアカデミア・デイ・リンチェイがローマに、続いて、1657年にアカデミア・デル・チメントがフィレンツェに、それぞれ誕生した。フランスでは1635年にアカデミー・フランセーズ、そして、1666年にアカデミー・ドゥ・シアンスが創設された⁽¹⁾。英国で最初の学術団体は、1662年に設立されたロンドン科学協会である。3年後にチャールズII世の勅許を得たこの団体は「王立ロンドン自然哲学推進協会」(以下、王立協会)となった。王立協会をモデルとして、地方でも科学団体が組織された。1683年にはオクスフォードとダブリンで、また、英国以外でもアメリカのボストンで、それぞれ科学協会が設立された。本論ではあまり知られていないダブリン科学協会について紹介したい。

ダブリン科学協会発足前後の英愛関係は複雑かつ微妙であった⁽²⁾。この頃、基本的にアイルランドはイングランド国王支配下の植民地であり、政治と宗教のいずれにおいても、制度上は宗主国イングランドに従属していた。英国のアイルランド支配は13世紀にまで遡るが、チューダー朝以後は、プロテスタントに改宗した英国がカトリック国アイルランドを支配するという構図になる。このような構図は、アイルランドにおける幾度かのカトリック教徒の反乱を契機に、次第に強まっていった。特に、1648年の反乱は、クロムウェルによるアイルランド征伐を招き、大規模な土地の没収政策によって、プロテスタント支配体制が強固に確立された。王政復古以後も英国の対アイルランド政策はこの基本線に沿って継承された。名誉革命の直後、アイルランドは再びプロテスタントとカトリック両勢力の軍事的衝突の舞台となるが、このときもまたプロテスタント英国側の勝利に終わり、以後も長らく植民地支配が存続することになる。

ダブリンはこのような英国のアイルランド支配の拠点であった。ダブリン市には、アイルランド総督府と全アイルランド大主教座という、政治と宗教における最高機関が置かれていただけでなく、19世紀半ばまでのこの国で唯一の大学であったダブリン大学が1592年に設置され、プロテスタント支配層の養成機関の役割を担っていた。王政復古以後に制定された一連の審査法(Test Acts)は、英国国教徒以外の公職への就任を禁じた。この法律は英国本土における非国教徒勢力の抑圧に効果があったが、人口の大半がカトリック教徒であったアイルランドにおいては、英国系プロテスタントによる支配の支柱となった。

知識人の組織である科学協会もまた、17世紀のその他の文化的側面と同様に、宗教的背景と無縁ではなかった。初期の王立協会の性格をキリスト教のいずれかの宗派ないしは特定の集団と関連付けようとする試みが、歴史家たちの間で行われてきたが、特定の集団の役割を強調しすぎるのは危険であろう。むしろ、宗教的闘争の時代にあって、宗教的イデオロギーを超えた次元で、新たな知的営為の組織化が試みられたとみるほうが妥当であるように思われる。

前史

アイルランドは、中世初期には「聖人と学者の島」の異名を取るほど、キリスト教神学を中心とした学問の高い水準を誇る国であったが、長い衰退期を経て再びヨーロッパの水準に追いつくことになったのは18世紀になってからである。スウィフト、パークレイ、パークといったアイルランドが生んだ18世紀の名高い知識人たちは、皆ダブリン大学の同窓生である。とはいえ、アイルランドには1854年にカトリック大学が創設されるまで、大学と名の付くものはダブリン大学ひとつしかなかった。

ダブリン大学は、1592年にエリザベスI世によって創設された。プロテスタントを国教とした英国が、異宗派の国アイルランドを効果的に支配するためには、プロテスタント教徒のための高等教育機関の設置が望ましかった。ダブリン大学は、植民地政府の官吏と英国国教会の支部であるアイルランド教会の聖職者を養成する機関という使命を最初から帯びていた。ダブリン大学は「トリニティ・カレッジ、ダブリン」(以下TCD)とも呼ばれるが、これらは事実上同一のものである。というのは、オクスフォード、ケンブリッジ両大学と違って、ダブリン大学は今日に至るまでひとつのカレッジしか持たないできたからである。

中世から近世にかけて、三つの「プロフェッションズ」——すなわち、法律家・聖職者・医師——が知識人の代表とみなされていたが、アイルランドの場合、それぞれの職業の組織化は法学院(キングズ・インズ)、アイルランド教会、王立アイルランド医学院という形を取った。法学院は1541年に、アイルランド教会は1560年に、そして、王立アイルランド医学院は1667年に、それぞれ成立した¹³⁾。ダブリン大学は、これら三つの職業に人材を提供する有力な機関ではあったが、唯一の機関ではなかった。というのは、アイルランドにおける知的集団の組織化に伴って、英国から相当数の人材が流入したからである。オクスフォード、ケンブリッジ、そして、スコットランドのアバディーン、セント・アンドルーズといった大学の出身者が、アイルランドでの三つの「プロフェッションズ」の中に占める割合は少なくなかった。

法的には、英国圏の全ての大学はカトリック教徒に対して閉ざされていたので、17・18世紀アイルランドの知識集団の中で、英国系、したがってプロテスタントの人間たちが、数の上で圧倒的であるのは何ら不思議ではない。このような意味で、17・18世紀アイルランドは「アングロ・アイリッシュ」の時代であった。ダブリン科学協会の歴史をみると、このアングロ・アイリッシュが活躍した側面は非常に重要である。

創設

ダブリン科学協会の創設に最も貢献したのは、ウィリアム・モリノー (William Molyneux) である。彼はいわゆるアイルランドの「古い英国系」(Old English) の家系で、ダブリンに生まれる。TCD を経てロンドンのミドル・テンブル法学院で学ぶ。数学と哲学に強い関心を持ったモリノーは、英国滞在中に王立協会の会合に立ち会うなど、当時の最先端の科学に触れる。1682年、モリノーは英国のモーゼス・ピット (Moses Pitt) が企画した英国地図の、アイルランドの部分に関する資料の収集のため、ダブリンの知識人たちに呼びかけ、会合を持つようになった。会合は TCD で行われ、当時学長であったナーシサス・マーシュ (Narcissus Marsh) も積極的に協力した。この会合を母体にしてダブリン科学協会が構想された。設立に当たっての主要な協力者には、モリノーの TCD 時代からの知己セント・ジョージ・アッシュ (St George Ashe) がいた。当初、ダブリン科学協会の会合は、わずか数人から成る「科学者の集まり」(*conventio philosophica*) であり、コーク・ヒル (Cork Hill) にあるコーヒー・ハウスを会場にしていたが、次第に人数が増えるにつれて、TCD の学長ロバート・ハンティングトン (Robert Huntington) の招きで、彼の部屋で行われるようになった⁽⁴⁾。

ダブリン科学協会の創設に当たって、王立協会とオクスフォード科学協会の両方の幹事であったロバート・プロット (Robert Plot) が激励の手紙を送っている⁽⁵⁾。協会の運営規約に同意した者は 14 名で、これが創設時の会員となった。記録に残っている最初の正式な会合は 1683 年 10 月 15 日に行われた。当初、協会長は世話係 (director) という肩書でチャールズ・ウィロビー (Charles Willoughby) が務めたが、初代会長 (president) に選ばれたのは、王立協会の重鎮でもありアイルランドと縁の深いウィリアム・ベティ (Sir William Petty) であった。創設の立役者モリノーは書記係 (secretary) となった。1684 年、協会はクロウ・ストリートにあったクロウズ・ネスト (Crow's Nest) という古い屋敷に、植物園と実験室を備えて、そこで会合するようになった⁽⁶⁾。この年の 12 月には会員数が 33 名に増えた⁽⁷⁾。1685 年にアイルランド総督に就任したクラレンドン伯 (Henry Hyde, 2nd Earl of Clarendon) は、協会の会合に招かれるようになり、その活動に対して理解を示した。翌年にはクラレンドンの勧めもあって、王立協会に倣ってダブリン科学協会を法人化し、国王の特許状を得ようとする動きが高まったが、会員の中になぜかこれに反対する者があり、構想は実現しなかったという⁽⁸⁾。1687 年 1 月に、クラレndon はアイルランド総督を解任され、4 月には彼の後任として、親カトリックの英国王ジェイムズ II 世の片腕ともいべきターコネル伯 (Richard Talbot, 1st Earl of Tyrconnel) が選ばれた。これを境に、アイルランドの英国系プロテスタント市民の多くが、政情不安からこの島を脱出したが、協会員たちもまた例外ではなかった。発足から僅か 3 年余りの後、ダブリン科学協会の活動は、不運にも外的要因によって発展を妨げられたのである。

名誉革命前後の争乱によって、ダブリン科学協会は一時的に活動を休止したが、1693 年 4

月から会合を再開した。このとき TCD 学長室に集まったのは 14 人だったが、協会の再出発をダブリンおよび近隣に在住の会員に連絡した結果、年の終りには 49 人を数えるまでになった。再出発に当たっては、以前に王立協会会長を務めたこともあるシリル・ウィッチ卿 (Sir Cyril Wyche) が尽力した。ウィッチ卿はハンティントンから協会を再興するように強く要請されたという⁽⁹⁾。再興後のダブリン科学協会の顔ぶれは、当時のアイルランドの上層階級を代表するものであった。このときの会員の中には大主教 2 人、主教 5 人、主席司祭 1 人、TCD 学長、TCD のフェロウ 5 人、貴族 3 人、准男爵 1 人、ナイト爵 4 人、医師 7 人、判事 3 人が含まれている。オクスフォード科学協会は、名譽革命の混乱以後二度と復興することはなかったが、ダブリン科学協会には復元力があったのである。

しかしながら、一見、ダブリン科学協会の復興は前途有望と見えたが、1695 年 7 月を最後に議事録は残されておらず、おそらく、1697 年 4 月頃に定期的な会合は休止したと思われる⁽¹⁰⁾。それから 10 年後の 1707 年まで協会が本格的に活動することはなかった。この 3 度目の再出発に貢献したのは、若干 18 歳のサミュエル・モリノーであった。サミュエルは、ダブリン科学協会創設の立役者ウィリアムの長男であり、TCD でかの哲学者ジョージ・パークレイを指導教官に学んだ、当時フェロウであった。1698 年に惜しくも父を 42 歳の若さで亡くしていたが、旺盛な知的好奇心と優れた才能が父親譲りであることは、誰しもが認めていた。彼は英国の科学者との通信によって、アイルランドの自然史についてまとめる必要を感じ、それに関する情報を旧協会員たちに募った。おそらく、これがきっかけとなって、第三次のダブリン科学協会が発足した。会長にはアイルランド総督ペンブルック卿 (Thomas Herbert, 8th Earl of Pembroke) が選任された。副会長職にはマーシュとウィリアム・キング (William King) が選ばれた。サミュエル・モリノー自身は書記係に、そして、彼の叔父トマスは幹事、彼の従兄弟サミュエル・ドッピング (Samuel Dopping) は会計係になった。この頃、会員数は 20 名ほどに過ぎなかったが、パークレイが加わったことによって、協会の足跡は記憶に留めるのに値することとなる。

会員と業績

ダブリン科学協会には、王立協会のボイル、ニュートン、フックのような科学史における巨星は存在しなかった。しかし、逸材は少なからずいた。創設時の会員 14 名のうち、7 名が王立協会会員であったか、もしくは、後に会員となった⁽¹¹⁾。同様に、1687 年までにダブリン科学協会の会員となった者のうち、王立協会会員となった者は 7 名いた⁽¹²⁾。これらの数字は、英国とアイルランドの間での科学者の交流が盛んであったことを示すものであるが、橋渡し役となったのは、主にアングロ・アイリッシュであった。

協会の全歴史を通じての正式会員数は 82 名である。ホッペンはその内訳を職業・学歴・出生地別に示しているが、ダブリン科学協会の特徴として、聖職者の比率が高いこと、商人の比率が低いことの 2 点を挙げている⁽¹³⁾。聖職に就いている会員 25 名のうち 14 名が主教であったか、もしくは、後に主教となっている。会員の職業別比率においては、ジェントル

マン、医師、貴族、軍民官吏が聖職者に続く。学歴別では、大卒者が6割で、そのうち TCD 卒業生が3分の2と圧倒的に多い。会員の中で商人の比率が低いのは、同時代の王立協会の場合も同様であるが、ダブリン科学協会においてはただひとりである⁽¹⁴⁾。

以下では、ダブリン科学協会の主な会員について記すことにする。

ウィリアム・モリノーは光屈折学の先駆者、デカルトの『省察録』の最初の英訳者、哲学者ジョン・ロックの文通相手、また、アイルランドにおけるナショナリズムの最初のマニフェストともいべき『アイルランドの国情』(*The case of Ireland's being bound by acts of parliament in England, stated*) (1698年)の著者として知られる。ダブリン科学協会では発表した論文は19点で、会員の中では最も多い。扱っているトピックは、光学・湿度計・月蝕・測量術・地誌など多岐に亘っている。ウィリアムの弟サー・トマスは、TCDとライデン大学で医学を学び、ダブリンで最も高名な開業医となったばかりでなく、第二期のダブリン科学協会において中心的な役割を果たした。彼が発表した論文は15点で、専門の医学に関するものの他に、考古学・古典学・博物学などに関するものがある。特筆すべきは、八角柱状列石が連なる現在の観光名所でもあるアントリム州の「巨人の道」(Giant's Causeway)に関する論考と、彼が監修した外科医トマス・プロビー(Thomas Proby)による女性の膀胱からのピン(bodkin)の摘出手術に関する記述である。いずれも、『王立協会科学年報』(*The Philosophical Transactions*)に掲載された。「巨人の道」はアイルランド自慢の自然の奇観だけあって、リチャード・バルクリー(Sir Richard Bulkeley)とサミュエル・フォウリー(Samuel Foley)ら他の会員たちも論考を寄せている。

ウィリアム・ペティは17世紀英国を代表する科学者のひとりである。ハンブシャー生れの彼は、幼少の頃から数学と機械学に興味を持つ。15歳で船員となったペティは、若い頃をフランスで過ごした。カーンのイエズス会の学校で学んだ後、20歳のとき英国海軍に入隊するが、内乱を機に大陸に戻り、ユトレヒト、ライデン、アムステルダム、パリで研鑽する。この頃哲学者トマス・ホッブズと知り合い、彼を通じてメルセンヌ神父などパリの科学者たちと交流するようになる。クロムウェル政権の英国に再度帰国した後は、文字複写機の考案により特許を与えられ、そのことがサミュエル・ハートリブの目に留まり、これを契機にボイルらとともに王立協会の前身であるロンドン科学協会を組織した。その後、オクスフォード大学の医学教授、ロンドンのグレシャム・カレッジの解剖学教授を務め、王立医学院および王立協会会員に選出されるなど、常に英国の科学の中心に身を置いていた。

ここではペティの経歴に詳しく立ち入ることはできないが、彼とアイルランドの関係は、クロムウェルのアイルランド討伐の所産としての国土調査に、調査官長(Surveyor General)として関わったことに始まる。カトリック教会および教徒から没収した土地について、アイルランド全土にわたって科学的に行ったこの調査は「ダウン・サーヴェイ」として知られ、王政復古後の土地再配分政策の基礎的資料として用いられた。このほかに、ペティは私財を投じてアイルランド全図を作成した。彼の仕事は以後しばらく、アイルランドの地勢と人口動態に関する基本的資料となる。ペティは『政治算術』(*Political Arithmetic*) (1683年)

や『アイルランドの政治的解剖』(*Political Anatomy of Ireland*) (1691年)を著わし、また、ジョン・グロント (John Graunt) の『ロンドン死亡統計表』(*London Bills of Mortality*) (1662年)の執筆協力者であり、今日でいう人口統計学の先駆者としても知られる。ダブリン科学協会における発表には、陸上運搬装置・鉱泉水の分析・航海術に関するものなどがある⁽¹⁵⁾。このうち、より快適な陸上運搬装置(馬車の一種)の開発は、ペティが長年取り組んだ船体を二つ持つ船の発明と同様に、彼の実用的な乗り物への関心を表わすものである。新型馬車の開発は不成功に終わったが、アイルランド発の企画として、英国においても少なからぬ関心を呼び起こしたという⁽¹⁶⁾。ペティは応用科学、あるいは、科学の実用性を説きかつ実践した第一人者であった。

医師アレン・マレン (Allen Mullen) は、サーカスの象が焼死するという幸運も手伝って、おそらくペティの監修の下、当時他に類を見ない象の解剖を1681年に行った。翌年マレンは、『象に関する報告』(*An Account of the Elephant*)を出版して、その成果を世に知らしめた。この書物の第二部は、眼球のレンズ体が脈管から成るという発見を含んでいる⁽¹⁷⁾。マレンはTCDの医学博士号を持つ開業医で、アイルランド医学院会員。また、ボイルの紹介で王立協会会員にもなったが、バルバドスに渡った際に不慮の死を遂げた。マレンがダブリン科学協会の会合で発表した研究は、大部分が医学的なものであるが、その他に人体の血液量と血液の循環速度、奇形の猫および鳥の頭部に関する解剖学的観察などがある。

セント・ジョージ・アッシュは文人ジョン・スウィフトとウィリアム・コングリーヴの指導教官として知られるが、ダブリン科学協会の影の立役者というに足りる才人であり、ウィリアム・モリノーと並んで「新科学」の可能性を最も信じた人物であった。アッシュはミズ州に生まれ、TCD卒業後指導教官・フェロウ・数学教授そして学長を務める。教会ではクロイン、クロア、デリーの主教を歴任する。アッシュはダブリン科学協会の会員の中で最も精力的に活動したひとりであり、書記係としてウィリアム・モリノーの後を継いだ。彼の関心は主に数学・天文学・気象学であったが、これに留まらない知的好奇心は正に「ヴァーチュオーソ」と呼ぶにふさわしい。彼がダブリン科学協会に寄与した発表は9論文で、モリノー家の3人に次いで最も多い。

アイルランド教会の重鎮となった2人の会員は、マーシュとキングである。マーシュは英国ウィルトシャー生れで、オクスフォード大学で神学博士号を取得する。1679年TCD学長となり、当時のアングロ・アイリッシュとしては珍しく、アイルランド語の研究を奨励した。彼は東洋の文化にも大いに関心があり、その方面の写本を収集した。マーシュがダブリン科学協会に貢献した唯一の論考は、音響学に関するもので、彼の音楽への造詣を反映している。マーシュは教会の位階において、協会会員の中でも最も出世した人物であり、ファーンズ、レイリンの主教職を経て、キャシエル、ダブリン、アーマーの大主教を歴任した。アーマー大主教は、さしずめ英国のカンタベリー大主教のような、アイルランド教会の最高位である。マーシュはまた、遺志により、ヨーロッパで最も早いとされる私設図書館を遺したことで知られる。彼の名を冠した「マーシュ図書館」は、現在も機能しており、初期活字本および東洋のものを含めた貴重な写本の所蔵によって、研究者に珍重されている。

キングはアントリムの長老派の粉ひき職人の家に生まれ、TCD に学んだ後、ダブリン聖パトリック大聖堂付牧師となる。その後、デリーとダブリンの主教に任ぜられる。ダブリン科学協会会員としては、創設時会員ではなかったが、最初期から会合に参加した。彼が寄与した論考は、落体の重量・水力学・鉱泉水などに関するものが5点ある。キングは、聖パトリック大聖堂主任司祭となった文人スウィフトの直属の上司であり、2人の間に交わされた書簡は多数残されている。

ダブリン科学協会の歴史の終りに近い1707年に、若冠22歳でメンバーとなったのがパークレイである。彼は無限の概念とダンモアの洞窟に関する二つの論考を残しているが、協会が1708年夏頃には活動を停止し、以後再開することはなかったため、大きな足跡を残すことはできなかった。

短命に終わった第三期ダブリン科学協会の主導者サミュエル・モリノーは、1712年にアイルランドから英国に渡り、1728年にロンドンで死去するまでこの地で暮らした。彼の死の3年後、実用科学技術の振興を掲げてダブリン協会が新たに組織されたが、このとき中心的役割を果たしたのは彼の叔父トマス・モリノーであった。現在の王立アイルランド学士院が創設されたのは1786年のことである⁽¹⁸⁾。

注

* 本稿は、1994年9月から1996年3月にかけて、筆者がケンブリッジ大学およびダブリン大学トリニティ・カレッジに客員研究員として在外研修した際の調査を元にしたものである。ダブリン科学協会の活動に関しては、ホッペン (K. T. Hoppen) が編んだ『ダブリン科学協会文書』(*Papers of the Dublin Philosophical Society*; 1982) が貴重かつ優れた資料である。これは、大英博物館に所蔵されているダブリン科学協会の1683年から1695年までの議事録と、TCD 図書館所蔵のモリノー文書、それに、協会員たちがやりとりした多数の散在する書簡を収集・分類・整理したもので、タイプ原稿にして1,800頁を超える大部なものである。ホッペンは原史料の他に、協会員の伝記、年次毎の役員のリスト、事項の解説などを加えており、研究者にとって大変使いやすく、また、非常に優れた資料となっている。残念ながら、『ダブリン科学協会文書』はマイクロフィッシュ版のみで、印刷した書物としては刊行されていない。筆者はこの貴重な資料を、TCD 図書館で閲覧することができた。ホッペンは『ダブリン科学協会文書』の詳細な解説記事を *Analecta Hibernica* 誌に発表しており、現物が利用できない研究者にとってはよい手引となる。本論はホッペンの研究に多くを負っている。

1. Martha Ornstein, *The Role of Scientific Societies in the Seventeenth Century* (1928; rpt. N. Y.: Arno, 1975), pp. 73-4, 139.
2. 17世紀後半のアイルランドに関しては、*Early Modern Ireland, 1534-1691* が詳しい。
3. Colum Kenny, *King's Inns and the Kingdom of Ireland: the Irish 'Inns of Court' 1541-1800* (Blackrock, Co. Dublin, 1992); J. C. ベケット著、藤森・高橋訳『アイルランド史』(J. C. Beckett, *A Short History of Ireland* [1966³]) (八潮出版, 1972年),

- 64-5頁; John Fleetwood, *History of Medicine in Ireland* (Dublin: Browne and Nolan, 1951), p. 42.
4. CS, p. 23.
 5. Simms, p. 39.
 6. Gilbert, II, p. 173; Simms, p. 40.
 7. *Ana.*, 168.
 8. CS, p. 97.
 9. CS, p. 175.
 10. CS, p. 177.
 11. Ashe, Richard Bulkeley, William Molyneux, Mullen, Petty, George Tollet, Willoughby の 7 人である (CS, p. 51; 242 n. 134)。
 12. King, Redding, Sir Paul Rycout, Thomas Smyth, Jacobus Sylvius, Wetenhall, Sir Cyril Wyche の 7 人である (CS, p. 51; 242 n. 135)。
 13. *Ana.*, 169-70.
 14. バーンロミュエ・ヴァノムリ (Batholomew Vanhomrigh)。オランダ人でウィリアム三世の軍隊で兵站総監 (commissary general) を勤め、後ダブリン市長となる。ダブリン有数の商人として富を築く。長女エスターは「ヴァネッサ」として知られるスウィフトの愛人であった。ヴァノムリが遺した屋敷は、ダブリンの西セルブリッジに現存し、St John of God 教団の所有であるが、1991年の第2回スウィフト・セミナーの会場となった。その後、敷地内に「ガリヴァー・テーマ・パーク」が設けられた。
 15. *Ana.*, 207.
 16. CS, pp. 147-49.
 17. CS, p. 37.
 18. *Eighteenth-Century Ireland*, p. 417.

参考文献

- K. T. Hoppen, *The Common Scientist in the Seventeenth Century*. [CS] The University Press of Virginia, 1970; rpt. Ann Arbor, Mich.: UMI, 1989.
- , *The Papers of the Dublin Philosophical Society 1683-1708: Introductory Material and Index*. *Analecta Hibernica*, 30 (1982), 151-247. [*Ana.*]
- , ed., *The Papers of the Dublin Philosophical Society 1683-1708*. [Microfiche, 1982]
- The Petty Papers*, ed. Marquis of Landsdowne. 2 vols. London, 1927. Reprinted in Vols. 1 and 2 of *The Collected Works of Sir William Petty*, 8 vols. (London: Routledge/Thoemmes Press, 1997).
- Michael Hunter, *Science and Society in Restoration England*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.
- , *The Royal Society and Its Fellows 1660-1700: The Morphology of an Early Scientific Institution*. 1982; rpt. London: The British Society for the History of

- Science, 1985.
- J. G. Simms, *William Molyneux of Dublin 1656-1698*, ed. P. H. Kelly. Blackrock, Co. Dublin : Irish Academic Press, 1982.
- Douglas Bennett, *Encyclopaedia of Dublin*. Dublin : Gill and Macmillan, 1994.
- The Book of Trinity College Dublin 1591-1891*. Dublin : Hodges, Figgis, 1892.
- John William Stubbs, *The History of the University of Dublin*. Dublin : Hodges, Figgis, 1889.
- Maurice Craig, *Dublin 1660-1860*. Harmondsworth, England : Penguin, 1992.
- John T. Gilbert, *A History of the City of Dublin*. 3 vols. Intro. by F. E. Dixon and Index compiled by D. Breathnach. Dublin : Gill and Macmillan, 1978.
- T. W. Moody, F. X. Martin, and F. J. Byrne, eds., *A New History of Ireland*. 8 vols. Oxford : Clarendon Press, 1976-91.
- Vol. 3, *Early Modern Ireland, 1534-1691*, ed. T. W. Moody, F. X. Martin, and F. J. Byrne, 1976.
- Vol. 4, *Eighteenth-Century Ireland, 1691-1800*, ed. T. W. Moody and W. E. Vaughan, 1986.